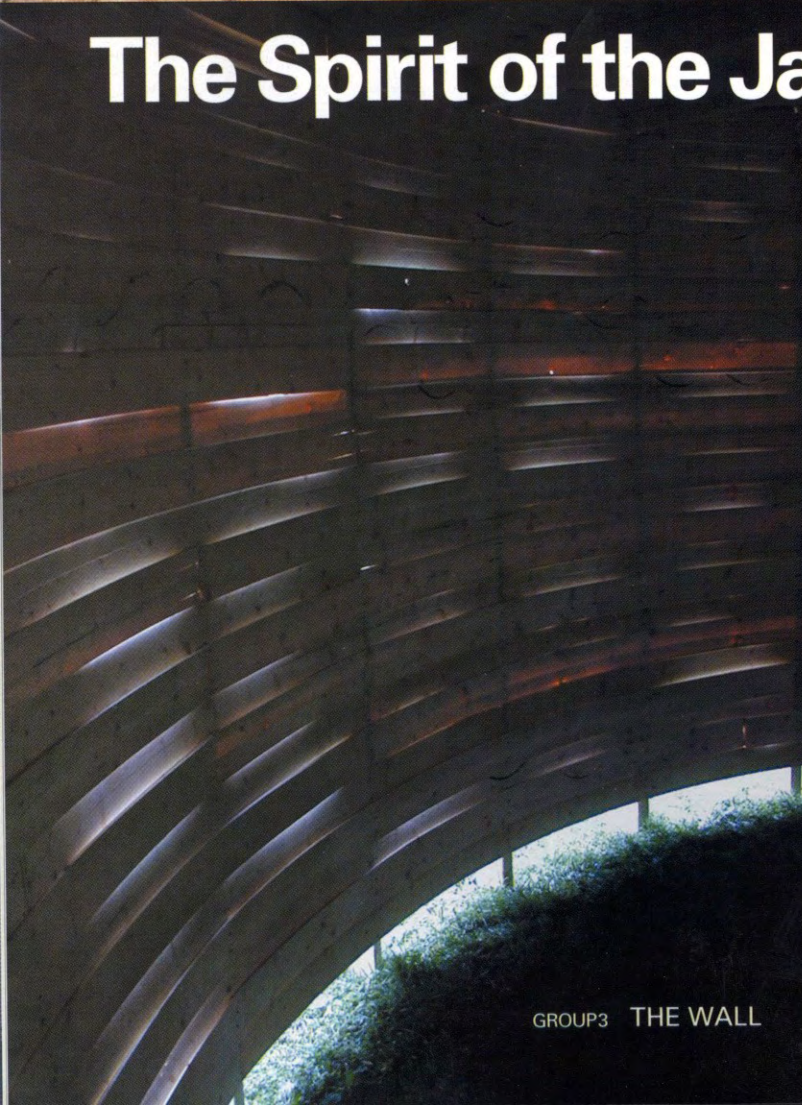




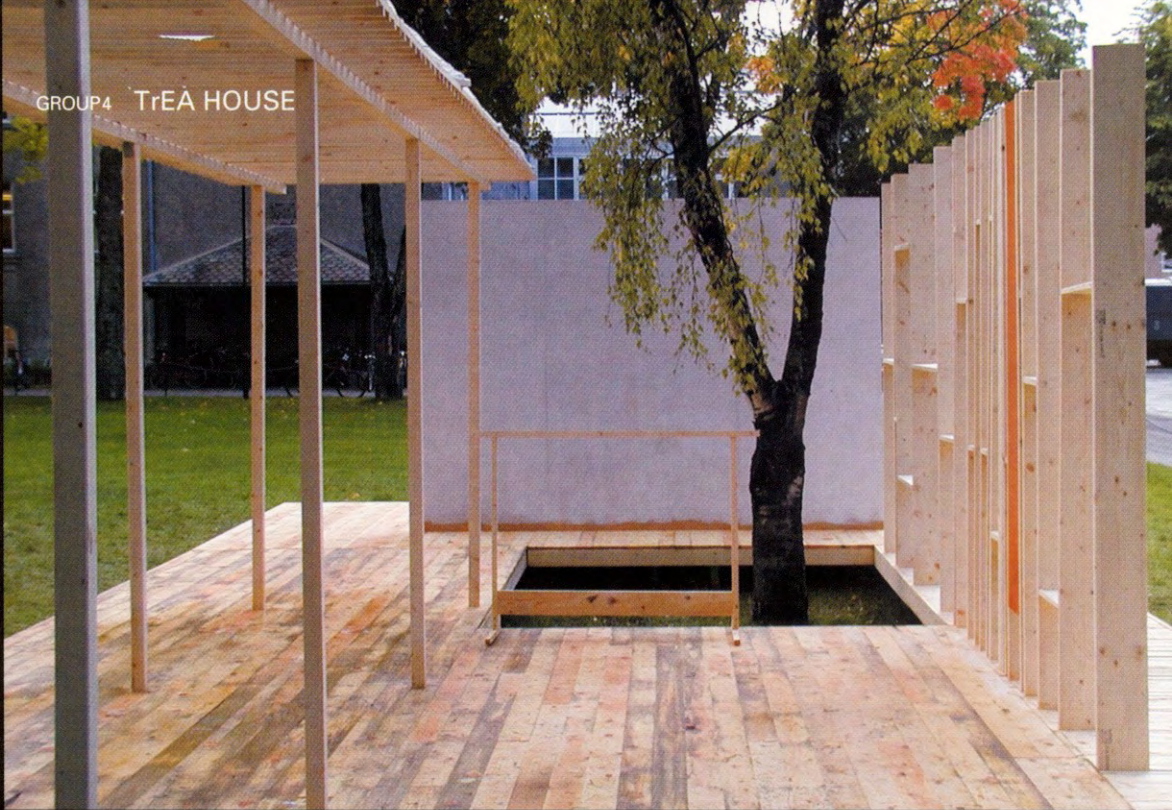
GROUP2 MENTAL U-TURN

Workshop in Norway

The Spirit of the Japanese Teahouse



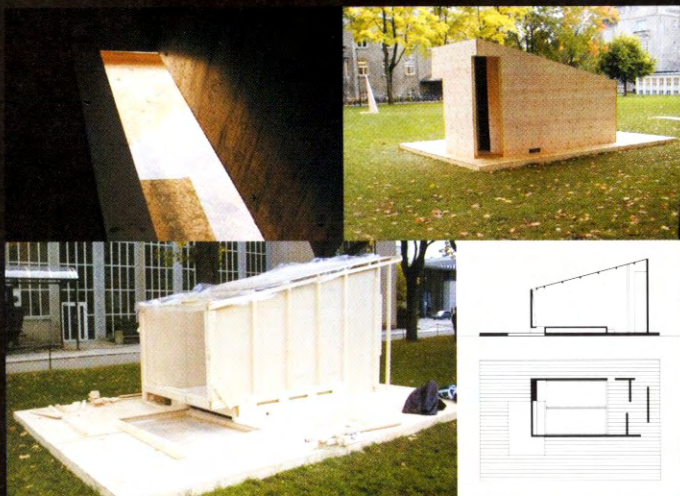
GROUP3 THE WALL



ノルウェー第3の都市トロンハイムにおいて、東京大学大学院生10名とノルウェー自然科学工科大学（以下、NTNU）学生9名による2国間共同ワークショップ「The Spirit of the Japanese Teahouse」が2001年9月16日から2週間の日程で行われた。このワークショップは、トロンハイム市全域で開催されたノルウェーにおける日本年の祭典「JAPAN 2002」（10月1日より2週間開催）に先駆けて行われたもので、発案・準備から開催に至るまでのすべてが日本・ノルウェー双方の学生によって運営された（日本人学生の渡航資金の一部は「JAPAN 2002」開催本部と財団法人大林都市研究振興財団の助成を受けることができた）。

ワークショップのねらいは、日本の伝統と認識されている茶室を取り上げ、その思想的背景と構成を東洋・西洋の視点で見直し相対化することで、現代においてこの伝統が如何なる意味をもち、また如何に建築化できるかということへの挑戦である。したがってこのワークショップは、さまざまに議論され再解釈された「現代の茶室」が実際に建ち上がってはじめて完成するものであった。期間中は、NTNUの建築・芸術学科の2名の教官がサポートにつき、われわれ学生は関連講義に参加したり、学生主催のレクチャーを互いに開催するなど、活発に議論を繰り返した。両国の学生混合で4、5名ずつの4グループに分かれ、はじめの1週間でコンセプトとデザインを決め、続く1週間でそれまでに設計したそれぞれの茶室を自分たちの手で施工するというプログラムである。





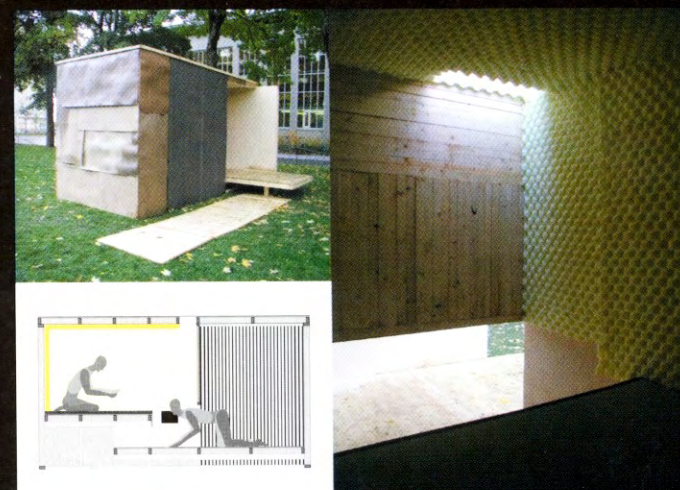
上左：内部より池を見下ろす。／上右：南東側から全体を見る。／下左：側面の内壁を施工したところ。その後、正面に鉄板を取り付け外壁を施工。茶室は池の上へ張り出す。

トロントの天気は変わりやすい。1日中雨が降ったりやんだりを繰り返すので、その雨を活かすことができないか考えた。また、茶室としての要素を考えたとき日常から切り離された静かな空間をつくること、茶匠のいない茶室で客をいかにもてなすかということが重要な点となった。トップライトから雨を茶室の内部へ降り込ませた。片流れの屋根によって集められた雨は、少し傾いた鉄板の上を流れ落ち、池へと降り注ぐようになっている。鉄板にはマグネットをつけた。マグネットの間を流れる雨は鉄板を腐食させ、そこに時間の経過が見て取れる。内部の壁を青くペイントすることで、しずかなひっそりとした空間をつくることを試みた。マグネットは自由に動かすことができる。客によって動かされたマグネットのパターンは「跡/TRACE」であり、次に訪れた客へのもてなしとなる。訪れた人は、前に訪れた見知らぬ人のもてなしを受け、次にくる見知らぬ人へもてなしを残していく。地面から高さ100mmのデッキには池がある。狭い入口から体をすぼめながら中へ入ると小さな青い空間がある。靴を脱いで畳へ上がると正面には雨の雫が光る鉄板がある。奥に進むと天井は低く下がり、足下には先ほど外で見た池が再び現れる。

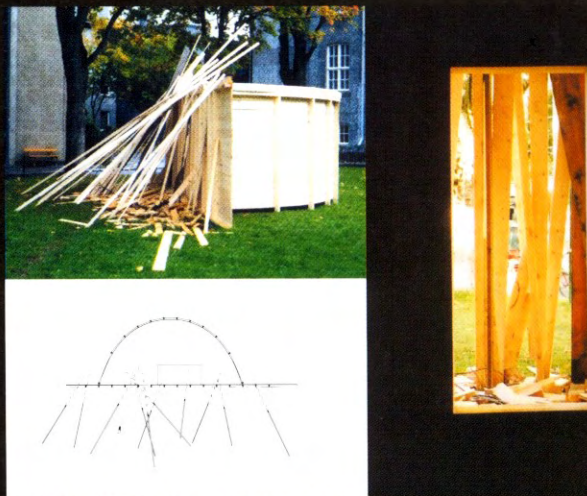
GROUP1 跡/TRACE

GROUP2 MENTAL U-TURN

この茶室は長い露地とその心理的効果を極小空間の中に再現しようという試みである。「長さ」に代わる要素として発見したのが「障害」とそれに要する「時間」。この茶室では垂直方向の変化と水平方向の変化を絶えず強えられる。その変化は奥へと進むにつれダイナミックになり、空間の質も開放から閉塞へとその性格を変え、見る人に絶えず驚きを与える。このような物理的・心理的障害がこの小さな茶室をより大きな空間へと感じさせ、より外界から隔てられた印象を与える。施工上の特徴は仮設であること意識したこと。その結果として外壁に段ボールを使用したことだ。本来なら雨仕舞いが重要になるが、数週間の仮設ということで下見張りをするのと表面をラッカーで保護すること以外特別なことはせず、屋根もあえて勾配はつけずシートルーフィングを段ボール上端にかぶせることで済ませた。9月のトロントの雨は予想以上に激しく、雨を含み重くなった段ボールは完成の翌日からはがれ始め、3週間後にはほとんどがはがれ落ちた。しかし雨を含み黒ずんだ段ボールの外壁はまさにノルウェー人メンバーの「wabi-sabi wall」という表現にふさわしく、また一般の建築における何十年、何百年というスパンの変化が数週間のうちに見られたということは面白く、面白くはないものではないだろう。



上左：施工途中、トップライトが見える。／下左：垂れ壁を潜り、畳の床に這い上がる。／右：内部。限られた光と音、スポンジの柔らかな感触による親密で抽象的な空間が広がる。



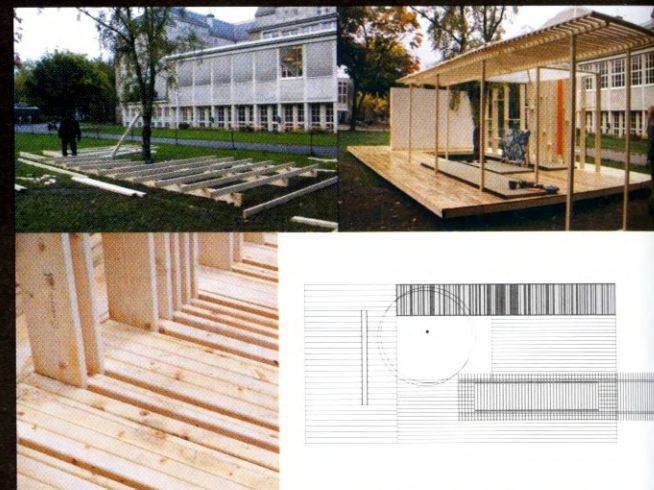
曲面壁を構成する板材には直線に戻ろうとする力が働くが、φ9mmのスチールワイヤーを曲に沿って各柱に通し引き締める力を加え、相殺させる構造とした。

都市空間が人工の、自然から守られた「内部空間」であるとすれば、その「内部空間」の中から再び「外部空間」である「自然」を切り取ることで、そして獲得された「自然」を体感し得るパヴィリオンとすることが、プロジェクトでの主要なテーマであった。まず10.6mの直線状の壁を建て、片側には陸屋根と半円状の曲面壁により空間を囲いとり、もう一方には建築廃材により緩やかなスロープをつくりアプローチとした。床はなく、芝生を建築内へ貫入させ、直線状の壁沿いに畳を1枚設置するのみとした。エントランスアプローチに立てかけられた棒材は体を少しかがめてくぐる形に設置し、これらは「歩みにくさ」や「通りにくさ」により、集中力を喚起し、感覚的距離感を長くするよう意図されている。曲面壁は2×4材から切り出した約5mm厚の細長い板材を、曲線状に並べられた柱に対し内側から打ちつけていき構成されている。また地面からは110mm、直線状の壁からは50mm浮かせて開口部を設けている。曲面壁は、唯一見ることができる要素を地面から生えている「草」に限定する役割をもつ。また畳は地面から高さ100mmに置くものとし、座ったときに「草」との距離を限りなくゼロに近づけるよう計画した。

THE WALL GROUP3

TrEA HOUSE GROUP4

この茶室はノルウェーの自然の一部を日本の自然に読み替える装置である。敷地は長さ75mの広い芝生とそれを等間隔に囲む高さ20mの木々であり、非常に統制された空間である。そして並木から少し外れたところに、存在感のない小さな木が植わっていた。この1本の白樺に注目しそれを囲むように、きわめてミニマルな建築を添えた。建物は、小さな白樺を大きな庭の中でもっとも引き立たせると共に、人が近づきすぎることを拒む。建築全体を「床」のようにして、はかなく小さなものを讃える茶室。そういった意味でこの茶室を「木のための家」すなわち「TrEA HOUSE」と呼ぶ。もてなしは広大な敷地に新たに加わったこの茶室と、そこにある白樺を発見することから始まる。人びとはデッキに乗って歩き、屋根の下に佇み、壁にもたれ座りつつ、白樺と相対する。普段、通り過ぎるだけの中庭に設置されたコミュニケーションのための茶室となる。コンセプトを実現するためには囲われた空間すら必要ないという結論にいたった。場に緊張感をもたせるために、デッキの板目合わせや各部材の寸法を適切に計画し正確に組み立てた。茶室の周りには人びとが座るために、芝生から30cmほど浮かせたデッキをつくり、さらに白樺の周りで時間を過ごすために2枚の異なる屋根をつくった。



上左：白樺の木を中心に床を組み上げていく。大引、根木の上に11mmの板材を張って床を浮かせた。／上右：全景。／下左：棚状の薄壁の足元。床にはスリットが続きリズムをつくる。

設計段階での条件を挙げる。敷地は大学中庭の芝生広場（約80m×40m）で、地面芝生の掘削は禁止。与えられた材料と予算は2×4、2×6inchの製材とフローリング材、それ以外の材料費として「JAPAN 2002」から1グループあたり約8万円が支給された。期間は、9月16日～9月29日の2週間で、完成後はさらに2週間その場で一般公開された。

実質の工期が1週間と聞いてます私が心配したのは、施工については素人同然のわれわれだけで、設計段階で思い描いた質を実現できるかどうかということだった。小さいとはいえ実際の使用に耐え得る建築をつくるには1週間は短い。実際2週目に施工に取りかかった際に、電動工具をはじめて手にする者もいて作業は難航したが、完成予定日2日前くらいからはメンバー以外の学友たちの協力も得て、なんとか完成した。その間、昼夜を問わず中庭には金槌の音が響いていた。

施工中、ノルウェー最大手の新聞『AFTERNOON-POSTEN』の記者をはじめ幾度かの取材を受けた。地元版には連日「JAPAN 2002」の紙面が設けられ、日本にまつわる活動や上映される日本映画の記事を目にし

ていて、市民の期待を感じながら作業は進んでいった。建築に限らず多くの学生たちが、われわれの茶室についてのレクチャーや日本の

生活習慣についてのレクチャーを非常に熱心に聴いてくれた。

NTNUの学生たちは、それまで立ち入り禁止の柵が張り巡らされていた中庭に、ある朝突然われわれが木材運び込み、敷地に何やら組み上げているのを見てさぞ驚いたことだろう。朝くる道と夕方帰る道に、この進み具合をチェックしていくことはなかなか面白いことだったに違いない。10月1日オープニング当日、現地駐在日本大使、「JAPAN 2002」実行委員、大学総長などを招いて、製作された茶室において茶会が開かれた。オープ



左・中：レクチャー、ワークショップ風景。／右：お披露目の茶会が催されたオープニングレセプション（Tea House）。

ニングレセプションには観客を合わせて約80名もの人が参加した。

2週間におよぶトロンハイム滞在では、NTNUのホストの学生たちの家にひとりずつホームステイし、寝食までも共にした。大学から徒歩圏内に住むのが普通で、その多くは他の学生との共同賃貸、すなわちシェアリングをしているため、われわれはホスト以外にも同世代のさまざまな学科の学生と触れ合うことができた。朝から晩まで学校にいて、帰りが早い日には同居の仲間たちと共に料理をする。そしてよく食べ、よく飲む。休日の夜は街で落ち合って皆で一緒に過ごし、夜明け前に自転車やバスで家路に着いた。街のサイズが小さい

始めた初期の段階から共同作業の課題を多くこなす。また、フルスケールモデルの制作を含む課題もある。私の知る限りこのような課題を中心に建築の初等教育を行うところは日本にはそれほど多くなく、日本との違いとして挙げておきたい。

私見を述べると、設計段階での共同作業の進め方は、相手の意見の長所を取り入れたり好き嫌いははっきり主張したりすることにおいて、われわれよりノルウェーの学生たちのほうがうまかったように思う。施工段階では、個人差は大きいものの概して日本の学生のほうが細かい造作にこだわり時間をかけるのに対して、ノルウェーの学生たちは大雑把な部分があるかわりに仕事が早かったよ

うに思う。長いようで短かった2週間のプログラムは終了し、その成果がご覧の4つの茶室となった。今回のように、世界中で同じように建築を学ぶ学生同士が意見をぶつ



ノルウェー自然科学工科大学の中庭に4つの茶室が並ぶ。右手前からGROUP3、GROUP1、GROUP2、GROUP4の作品。

ので可能なことではあるが、自力では払いきれないほどの高い家賃を払っていきながら歩いては学校に通えないわれわれの目には少々うらやましい生活に映った。

共同作業のコミュニケーションはすべて英語で進められた。お互い母国語ではない言語での意志伝達は、日本語同士のような配慮ができない分、われわれ自身を議論のエッセンスに直接的に向かわせることになり、ぶつかり合いが増えるかわりに非常にエキサイティングであった。建築教育に関することでいえば、彼らは1年生で建築の勉強を

け合ったり、今の建築について議論したりする場がもっと増えていくといいのではないだろうか。来年あたりには、海外の学生たちが日本の地を踏んで、異なるテーマでワークショップが行われているかもしれない。

（大久保康路／東京大学大学院）

ワークショップ参加メンバー

GROUP1：飯田倫子（及川清昭研究室）／成瀬友梨（曲淵英邦研究室）／Audun Hellemo／Tomas Lovset
 GROUP2：高沼晶子（岸田省吾研究室）／田野倉徹也（学部4年）／Eskild Andersen／Tor Olav Austigard
 GROUP3：木内俊克（鈴木博之研究室）／松尾美和（大野秀敏研究室）／Kjell Bertelsen／LisaWesterdahl
 GROUP4：／猪熊純（岸田省吾研究室）／大久保康路（清家剛研究室）／宮岡冴子（伊藤毅研究室）／Christian Bakke／Heidi Oestergaard
 サポート：戸田穂（鈴木博之研究室）／Siri Stromme Johansen
 指導教官：Bjorn Otto Braaten／Erling Rohde（NTNU）



左：模型による施工の検討（GROUP2）。／中：施工風景（手前はGROUP2）。／右：夜間も作業が続けられた（GROUP4）。194-197頁の写真提供：東京大学ワークショップ参加メンバー。